



後世につなごう 長洲町の伝統文化



町には、先人たちから受け継がれてきた多くの伝統文化があります。

地域の人々によって守り継がれてきた清源寺神楽や腹赤の楽・神楽。無病息災を願う勇壮な神幸行列が長洲小学校校区を練り歩く長洲祇園祭。そして婚礼の際などに歌い継がれてきた長洲嫁入り唄。これらは地域の歴史や風土、人々の暮らしの中で育まれ、長きにわたり大切に受け継がれてきました。

しかし、少子高齢化や生活様式の変化により、担い手の確保や技術・知識の継承など、多くの課題に直面しています。

それでも、伝統を絶やすことなく未来へつなぐ活動が続いている人がいます。

今回の特集では、長洲町に受け継がれる伝統文化と、その継承に携わる人々の思いや取り組みを紹介します。

地域の宝が紡いできた歴史と、その未来への歩みに触れてみませんか。



長洲祇園祭



腹赤神楽



的ばかい



野原八幡宮神事 節頭行事



長洲嫁入り唄



清源寺神楽

受け継がれる伝統文化

長洲町に受け継がれている伝統文化の一部を紹介します。

▼長洲祇園祭

一時は途絶えていましたが、平成21年に40年ぶりに復活した神幸行列で、四王子神社を始点・終点に、長洲小学校区16カ所のお旅所を2日間かけて練り歩きます。太鼓の音とともに「ぎよんさん、ぎよんさん」の威勢

のいい掛け声特徴のお祭りです。本年度から1日のみの開催となり、1年ごとに上区と下区を順番に練り歩きます。

▼清源寺神楽

明治頃から続く神楽舞。無病息災や家内安全、五穀豊穡への願いを込め、笛や太鼓に合わせて舞う十座の神楽が、代々受け継がれています。

現在は、各神事や大祭での奉納に向け、練習を重ねながら、その伝統を次の世代へつないでいます。

▼腹赤神楽

いつ頃から始まったのかは定かではありませんが、その歴史は古く、笛や太鼓、三味線の音色に合わせて演じられます。中でも鬼の面をつけて舞う「鬼神さん」は、多くの人に親しまれていました。

▼的ばかい

四王子神社で、1月中旬に行われる神事で、藁と麻で編み込まれた直径

約60cmの「的」を、締め込み姿の男たちがばかい（奪い）合います。

これは安土桃山時代に、四王子神社を現在の社地に移す際、氏子たちがご神体を乗せた円座を奪い合ったのが起源と言われています。

▼長洲嫁入り唄

もともとは「肥後の嫁入り唄」と呼ばれ、江戸時代中期頃から、熊本県内、特に有明海沿岸地域で親しまれ、庶民の唄として歌い継がれてきたといわれています。

長洲小学校区では、昭和10年頃まで、婚礼の際に花嫁の友人や知人がこの嫁入り唄を歌い、手拍子をしながら家の門口から花嫁を励まし見送る風習がありました。

この風習の中で、いつしか「長洲嫁入り唄」と呼ばれるようになったと言われています。

▼野原八幡宮神事 節頭行事

荒尾市指定無形民俗文化財である節頭行事です。荒尾市・長洲町の28地区の中から3地区が奉納を行います。馬に乗った子どもと、仲間といわれる馬の手綱を持って先導する者が御供人とともに「ヘーロイ、ヘーロイ」という掛け声で野原八幡宮まで練り歩きます。

伝統文化を守る人たちの思い



長洲嫁入り唄保存会 会長

荒木 睦子 さん

歌詞に込められた親心

本年度から長洲嫁入り唄保存会の会長を務めています。

月に1回の練習を行いながら、のしこら祭や文化祭、20歳を祝う会、立志式など、年間を通してさまざまな場で長洲嫁入り唄を披露しています。

長洲嫁入り唄の魅力は、歌詞に込められた「親心」です。大切に育ててきた娘の幸せを願い、新たな人生の門出を祝う親の思いが歌われています。時代が変わり、若い世代には当時の結婚の風景がイメージしにくいかもしれませんが、

せん。しかし、親が子を思う気持ちは今も昔も変わりません。

親になり、子どもを見守る立場になって初めて、歌詞に込められた深い愛情に気付かされることもあります。

郷土の財産を未来へ

その普遍的な思いが込められた長洲嫁入り唄を、これからも大切に受け継いでいきたいと思います。

しかしながら、会員の募集を行っているものの、現在の会員は最も若い人でも60代後半と、新たな担い手の確保には苦労しているのが現状です。

今後は、若い世代にも唄や踊り、鳴り物の継承に関わってもらいながら、町内のさまざまなイベントで披露する機会を増やしていきたいと考えています。先人たちが残してくれた貴重な伝統芸能を「郷土の財産」として後世へ引き継ぐため、これからも保存会の活動を続けていきます。



▲嫁入り道中の様子

神楽を未来へつなごう

私は定年退職後に神楽に携わるようになりました。清源寺に伝わる神楽は、長年にわたり受け継がれてきた大切な伝統文化です。清源寺神楽は十座（10種類）の神楽舞で構成され、それぞれが特色のある神楽舞となっています。

現在、清源寺神楽は17人で活動しており、うち3人が小中学生です。

2週間に1回、日曜日の午後7時30分から練習を行い、神楽の継承に励んでいます。

神楽を将来に残していく上で、最も大きな課題は後継者の育成です。

担い手の高齢化が進んでおり、参加を呼びかけているものの、生活スタイルの変化などから新たな担い手の確保は容易ではありません。

伝統を絶やさないために

清源寺神楽では、毎年9月の天満宮大祭に、腹赤小学校3年生の児童が神楽の見学に訪れるほか、11月頃には腹赤小学校にて、神楽体験を実施しています。



清源寺神楽 代表

田上 正二 さん

実際に神楽に触れてもらうことで、地域に受け継がれる伝統文化への理解を深めてもらいたいと考えています。

また、これまで神楽は口伝えで受け継がれてきましたが、舞や所作を映像として記録する取り組みも進めています。そうすることで、より正確で確実な継承につなげたいと考えています。

地域の歴史や先人たちの思いが込められた神楽を絶やさないためにも、今できることを一つひとつ積み重ねながら、次の世代へ確実につないでいきたいと思っています。



若い世代から見た伝統文化

神楽の姿はかっこいい

現在、清源寺神楽に参加しているの

は、村里美咲さん（長洲中1年）、福田茉佑さん（腹赤小6年）、山城剛さん（腹赤小5年）の3人。兄や姉が清源寺神楽を習っていたことや、腹赤小学校の授業の一環として参加した神楽体験をきっかけに興味を持ち、活動に参加するようになったそうだ。

神楽の魅力について尋ねると、「袴姿で踊るところがかっこいい」と声を揃える。袴姿で神事や神楽体験の場に立てることは、友達にも自慢できることのひとつであり、神楽を続けていて良かったと感じる瞬間だという。また、神楽奉納のためにさまざまな神社を訪れる



▲清源寺神楽に参加している山城さん、村里さん、福田さん（左から）

機会があり、普段はなかなか行くことのできない場所に行けることも楽しみの一つだと話す。

現在、8月1日に行われる土用簞りの神事に向け、十座の一つである「初剣」の練習に励んでいる。

村里さんは、「踊りを覚えるのは難しいけど、一つひとつの動きを身に付けながら練習を重ねています。神楽体験や呼びかけを通して、もっと多くの人に興味を持ってもらえたらうれしいです」と話す。

子どもたちの活動は、清源寺神楽の魅力を次の世代へ伝える大切な機会となっている。一人でも多くの子どもたちが神楽に親しむことが、伝統文化の継承につながっていく。



▲8月1日の土用簞りの神事に向け「初剣」の練習に励む3人。

昔の人の思いを身近に感じた

花嫁役のお話をいただいた時は、不安な気持ちが大きく、緊張もしていました。しかし、本番では多くの方に温かい言葉をかけていただき、とても励まされました。

大変なこともありましたが、地域の皆さんに喜んでいただけて、この役を務めることができて本当によかったです。また、昔はこのような地域の皆さん

に祝福されながら花嫁が嫁いでいたことや、昭和の初め頃までは花嫁の友人や知人が歌や手拍子で囃し立て、励ましながら見送っていた風習があったことを初めて知りました。

実際に花嫁役を体験してみて、昔の人たちが地域のみんなに見守られ、祝福されながら嫁いでいたことを身近に感じることができました。

長洲町の伝統を支える一員になったことをとてもうれしく思います。



▲長洲嫁入り唄に花嫁役として参加した廣岡凜音さん

結びに

長洲町の歴史や風土から生まれた伝統文化には、子孫繁栄や豊作など人々の願いが込められており、多くの人々の手によって今日まで受け継がれ、親しまれてきました。

伝統を未来へつなぐと工夫や努力を積み重ねながら活動する人や、伝統文化に触れ、その魅力を感じ

じる若い世代の姿からは、郷土の文化を大切にしたいという強い思いを感じるができます。

10月から11月に開催される「伝統文化の祭典」や、「長洲町文化祭」では、こうした伝統文化に触れることができます。町の歴史や先人の思いが詰まった地域の宝。ぜひその魅力を感じてみませんか。